

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・ 教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科 岐阜聖徳学園大学 事業名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】 新たな「児童・生徒と教師の探究的な学び」を支える実践コミュニティの生成プロセス 開催日時：2025年8月19日（火） 午前10時～午後3時30分 開催場所：岐阜聖徳学園大学（岐阜県岐阜市柳津町高桑西一丁目1番地） 参加人数（総数77人）：教育委員会11人、小・中学校/高校管理職16人、小学校教員8人、中学校教員9人、特別支援学校教員1人、義務教育学校教員1人、高校教員5人、大学教員等13人、高校生2人、大学生・大学院生11人
--	---

目的：

本研修の目的は、①令和の日本型学校教育において求められている、学習者中心の探究的・協働的な学びを具体的に展開できる教師の力量形成に向けて、教師自身が多様な人と関わりながら「主体的・対話的で深い学び」の在り方を考える実体験の機会を提供すること、②さらに「コミュニティ」に焦点を当て、子どもと教師の探究的で協働的な学びを支える実践コミュニティがどのように生まれるのか、その生成プロセスを紹介し、学びの相似形を連鎖的に生み出していく「フラクタルな実践コミュニティ」の重要性について啓発することである。

内容： ※全体発表の内容をテーブル起こしするなど、具体的に記載すること。

教職大学院フォーラム（午前の報告会）

（報告1）埼玉県立狭山緑陽高等学校 教頭 岡本敏明

「小さくはじめる第一歩 ～個の変容が、組織の変容につながる～」

埼玉県から島根県立隠岐島高校に赴任し、主幹教諭として日々を送る中、二人の同僚と協力して業務の流れを改善したことが、やがて地域を巻き込む教育改革へと発展した。埼玉県に戻った後もその経験を活かし、地域の魅力や課題をテーマにした探究的な学びに「じっくりと時間をかけて」地域の人々と創り上げていった。この取り組みは狭山緑陽高校全体の意識改革につながり、生徒と教員が自ら課題を考え、主体的に判断する「学びのコミュニティ」へと成長していった。「まずは小さく関係性をつくり」、「関わる大人自身の学びにもつながる」動的な変容のプロセスが、報告者により生き生きと語られた。

（報告2）岐阜県立可児高等学校 教諭 栗原遥 『『探究的な学び』を実現するための本校の取り組み』

総合的な探究の時間を通じて、生徒が「自ら学ぶ力」を培い、それを教科へ活かす実践が紹介された。学校は新たな学力観に基づく教育を実現するため、段階的に教員研修を行ってきた。その際、教科や経験年数が異なる少人数グループを組み、相互理解と協働を促す「伴走型研修」を取り入れている。この研修で、教員は共同エージェンシーの段階を把握し、その中での自分の立ち位置が分かることで、安心感や共通理解が得られるようになった。こうした教員組織の成長が、生徒の共同エージェンシーを育むことにもつながった。生徒は主体的に地域課題に取り組み、探究的な学びを深めるようになった。校長の強いリーダーシップのもと、生徒の成長と「前向きな教員たちのコミュニティ」の活気ある姿が伝わる、理念と実践が調和した報告であった。

（報告3）瑞穂市教育委員会学校教育課 課長 川田英樹 「主体的な学びを深める研修の在り方」

教員が生き生きと成長を実感できる研修の在り方を追求する瑞穂市の取り組みが紹介された。特筆すべきは、研修の効果を丁寧に分析している点である。「研修者の声を聴く」アンケート調査により、「授業力」「指導力」など5つの観点から、同僚や管理職との関係性や助け合いが成長の契機となることが明らかになった。これを踏まえ、瑞穂市は教員が安心して意見を共有し、教育に専念できる「コミュニティを活かした研修」を系統的に推進している。新たな研修観を市教委が教員に寄り添う形で具現化した、説得力のある事例であった。

（コメント）福井大学 准教授 遠藤貴広

「コミュニティ」という概念について、福井大学連合教職大学院での教育を例に、実践だけでなく理論的枠組みにも触れることで、自らの実践を捉え直すことができるとの説明がなされた。例えば *Communities of Practice* の「*Cultivating*」については、7つのコミュニティが育つ原則を説明後、コミュニティを育てるために耕すとの意味づけがなされた。特に、同質性を持った共同体は放っておいてもよいが、異質性のある場合は、意図的に異質性を排除しない組織づくりをすることの大切さにも言及があった。それは全体主義に陥らないためである。さらに、「体験していないことは省察できない」「データは、解釈するのではなく使って対話をするものである」などの実践的な視点からのアドバイスも提示された。学校からの3つの報告を踏まえて、全体を結ぶ啓蒙的なコメントであった。

2. ラウンドテーブル（午後の部：10グループ）

今回の研修では、小学校から大学までの教員や管理職、教育委員会職員、高校生、大学生・大学院生と、多様な立場の人々が参加し、活発かつ和やかな語り合いが行われた（アンケート参照）。

成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

アンケート（4件法）と自由記述の集計結果から「探究的な学びを支えるコミュニティ」について理解が深まり、学校種を超えて語り合いたいという意欲が高まったことが分かった。（有効回答数：午前 28、午後 23）

- (1) 午前の報告会 ・教育におけるコミュニティの重要性への理解が深まったか → 「とても深まった」：82%
・全体としてフォーラムは有意義であったか → 「とても有意義であった」：75%

コメント抜粋 「実践コミュニティの発展の要件という、大きなフレームで今のコミュニティを再評価する視点は常に持っていたいと思いました。」 「岡本先生の『立ち上げ』、栗原先生の『実践中』、川田先生の『行政』、遠藤先生の『理論』と、バランスが良かった。」

- (2) 午後のラウンドテーブル ・様々な人と話し合いができたか → 「とてもできた」：87%
・さらに共に語り合いたいと思ったか → 「とても思った」：82%

コメント抜粋 「様々な立場の方の実践やお話を伺い、省察的实践とそれを支えるコミュニティの重要性を再確認しました。」 「参加者全てが満足できる時間でした。立場を超える有意義な会。」

「NITSからの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

「共通言語」①「研修デザインの三角形」について、1) 児童・生徒と教員コミュニティは相似形であり互いに良い影響を与え合うこと、2) それは小さな働きから、市教委レベルでのコミュニティづくりに至るまで、多層的なコミュニティを構築しうる（遠藤コメント）こと、3) またこれらの内容をラウンドテーブルを通じた語り合いにより深めていく参加者の姿が確認できた。「共通言語」②「研修目標の3要素」については、午前・午後のプログラムを通して1. 「新しく知る」、2. 「自らの気づき」、3. 「自己のあり方」（コミュニティの在り方、コミュニティ生成へのアプローチ）についての気づきが段階的に深まっていった。さらに、午後のラウンドテーブルでは、様々な校種や経験・立場の教育従事者との対話を通じて、これらの『気づき』が開放的な雰囲気の中で醸成された。「共通言語」③「豊かな気づきが醸成される学び」及び④「探究型研修」については、本研修プログラムを通じて、小学校から大学院といった縦の連続性や、県・市教委・各学校に至るまで横につながれた。「共通言語」⑤「学び合いのコミュニティ」では、多層的に構築され始めた、と確信した研修であった。

アイデアや工夫したこと：※実際の様子により分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明すること。



午前の部：フォーラム風景

高校と市教育委員会からの実践報告を通じて、校種・機関を超えたコミュニティ形成の重要性が理解できるよう配慮した。さらに、これらを統括するコメントを加えることで、コミュニティが重層的に構築されることにより、高次元の機能を果たせることを理論的にも示すように工夫した。一方で、共通意識を大切にしながらも、多様な個を尊重することの重要性についても啓発することに努めた。



午後の部：ラウンドテーブル風景

今回は岐阜県を中心に多様な校種・立場の人々が参加した。経験豊かな教職員をファシリテーターとして各テーブルに配置し、参加者同士が自由に語り合うことで、共感の内に気づきが生まれるよう工夫した。またそれぞれのテーブルの語り手・聞き手について、極力、校種・立場の異なる人々を配置して、多層的なコミュニティの形成を目指した。